

七夕と盆踊りく旧暦でクロスする二つの伝統く 嶋田研志郎

ここ二十年かけて、交野と枚方は七夕の町というブランドが根付いてまいりました。両市のゆるキャラ、おりひめちゃんとおぼしくんも人気です。さて、ここでクエスチョン。皆さんは、七夕と言えば、七月七日を思い浮かべるかと思いますが、なぜ、梅雨真っ只中に星空を見上げるイベントがあるのでしょうか？

この答えは意外と簡単で、新暦と旧暦の違いです。私たちは今、太陽を中心にし、一年を十二ヶ月、三六五日に分ける新暦(太陽暦)を用いています。ただ、この新暦は明治時代以降日本に導入されたもので、それまでは月と太陽の動きを使った旧暦(天保暦)が用いられていました。では、その旧暦の七月七日は一体どういう日だったのか。天空には上弦の月が輝き、南の空に輝く天の川を渡る一槽の舟のように東から西へと動いてきます。つまり、月の動きと連動した日付が旧暦の七月七日ということになります。

さて、次のクエスチョン。旧暦の七月七日は七夕ですが、旧暦の七月十五日は何の日でしょうか？これは、勘の良い人ならすぐ察するかもしれません。答えは、お盆です。「八月じゃないの？」と疑問に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、新暦に代わると、七月十五日は農作業の忙しい時期でした。一説によれば、国民の九割が農民だったともいいます。それで、一ヶ月遅れの八月十五日付近をお盆とし、今に至ります。東京などでは今でも、七月十五日にお盆を行う家庭も多いです。こち亀の両津の浅草の実家も七月にお盆を済ませていきます。つまり、旧暦で見ると、七夕からお盆までの十日間は正に一続きだったわけです。ちなみに、交野ヶ原は河内音頭の源流であり、元節とも言われている交野節の発祥地でもあります。江戸時代には、盆踊りで盛り上がる民衆があまりにも多く、お上がお触書を出し、自粛を要請した逸話もあるほど、盆踊りとも縁が深いのが交野ヶ原です。

七夕と盆踊りという、夏の日本の二大伝統が交差するクロスロード、それもまた、交野ヶ原を語るうえで外せないキーワードになるはずですよ。

天の川・交野ヶ原日本遺産プロジェクト 廣瀬雅雄

私は「天の川七夕星まつりの会(以下七夕の会)」の代表をしています。当プロジェクトには七夕の会として参画しています。七夕の会は、ふるさと交野ヶ原(枚方市・交野市・寝屋川市の一部)旧交野郡全域と茨田郡の一部)を日本における七夕伝説発祥の地としてふさわしい文化と風情を市民の立場で創り、世界へそして次の世代へ伝えていく活動をしていこうと、平成元年に市民の有志で立ち上げた団体です。

七夕の会では二〇〇七年の枚方市制六十周年のとき、奈良県天川村など七夕に縁のある町が一同に会す全国七夕サミットを、枚方市・交野市と協働で行いました。交野市には織姫を祀る機物神社があり、天野川をはさんで枚方市には牽牛石があります。天野川には逢合橋、天津橋、鶴橋といった名前の橋や「天の川」という名の交差点、星田、星ヶ丘、中宮など星にちなむ町名があり、天野川上流には物部氏の祖先神・饒速日命が天下ったとされる天の磐船を祀る磐船神社や、織女石を祀る星田妙見宮、さらに獅子吼寺では弘法大師空海が求聞持法で星を降らせた伝説もあります。また、桓武天皇は交野天神社を作り郊祀壇を設けました。平安貴族は天の川の和歌を詠み、天女伝説もあります。このように、ここ交野ヶ原は、天体にまつわる地名や伝説が集積されている日本でも稀有な場所なのです(参考論文「民間伝承の地域的特性に関する歴史地理学的研究」京都学園大学二〇一一年度人間文化学部学生論文集・中村好恵)。

このような魅力的な地域資源を持つ交野ヶ原を、歴史文化だけでなく物産や観光など経済的要素も視野に加えながら、文化庁が認定する日本遺産のストーリーとして伝え発信していこう、という市民プロジェクトが立ち上がりました。「天の川・交野ヶ原を日本遺産に！」と七夕の会のイベントチラシに書いたことから不思議な縁が紡いで始まった天の川・交野ヶ原日本遺産プロジェクト。よろしくお願いいたします。



く天空の地上絵 交野ヶ原く

佐々木久裕

古くは出雲族・物部・秦・百済などの渡来の人々によって織りなされた歴史の縮図。交野ヶ原とは、天野川右岸に広がる原野一帯を指す地名である。

「枕草子」には「野は……交野……すずろにをかしけれ」とあり、趣のある野のひとつとされた。この交野ヶ原で天津御祖の詔をうけ、物部氏の始祖饒速日尊が天の磐船に乗って、河内国の河上の峠が峰に降臨したという天孫降臨神話が『先代旧事本記』の第三巻「天孫本紀」に記載されている。四世紀頃には、この肩野物部氏の祖先たちによって、天野川流域で「米作り」が初められた。この天野川の天女伝承が曾称好忠の歌集、『曾丹集』にある。三世紀後半から四世紀にかけて、物部の一族のものと思われる古墳が天野川流域に多く造られた。さらにこの流域には羽衣橋や逢合橋、鶴橋などの七夕にまつわる橋が存在し、枚方市茄子作にある中山観音寺跡の大岩を「牽牛石(牛石)」と称し、交野市倉治の機物神社では、七夕伝承にちなむ織姫「天棚機比売大神」「栲機千々比売大神」を二神体とされた。交野市星田にある星田妙見宮(小松神社)のご神体は、「織女石(タナバタ石)」と呼ばれていた。貞観十七(八七五)年に書かれた、『妙見山影向か石略縁起』によると、嵯峨天皇弘仁年間(八一〇〜八二四)に弘法大師空海が獅子窟寺の山中の吉祥院にある獅子の岩屋に入って修行をしているとき七曜星が三ヶ所に降ってきたという。俗に八丁三所といわれる星の降臨伝説である。現在の枚方市駅の東南には、かつて別子山と呼ばれた小高い丘があり、一乗寺所蔵の「天ノ川鈴見地藏尊縁起」によると、ここには天人女房譚と繋がる鶴女房伝説が残っている。そして桓武天皇が七八五年、日本で初めて天皇として天神を祀る郊天祭祀を行ったのも交野ヶ原であった。

百済王氏をはじめ、多くの部族・渡来人が往来した時空の交差点。交野ヶ原は古代より天地を結ぶ天体に關する伝承や神社が数多く残っている。日本人の天地和合、調和の思想が育まれた特異な空間であったのである。



TSUTAYAで育った僕のカルチャー

神田錦之介

私が交野ヶ原に引っ越してきたのは、十歳の時でした。まだ、三越百貨店と近鉄百貨店、長崎屋が健在だった京阪枚方市駅前には、午後八時には眠る町だと感じていました。

そんな中、不夜城のごとく、夜の十時まで煌々とネオンを照らしていたのが、ご存じの TSUTAYA。エル枚方内の一階がセル、二階がレンタルと分けられていたレンタルビデオ屋は私の十代のページを彩っています。

今でこそ、店頭の手書きPOPでのコミュニケーションは当たり前前のツールとなつていますが、私が十代だった九十年代後半からゼロ年代初頭は効果的な販促ツールとして光を浴びだした頃です。例えば、中学三年生の時、オシャレな曲がないものかと思いつたブシヤレな曲を取り、試聴機へ向かうと、流れてきたサウンドは「真夜中のドア〜Stay with me〜」原曲を知らなかった私も即座に市川藍さんのCDをレンタルしました。

逆にこういふ出会いもありました。高校一年の秋、自宅で見ていたテレビ番組が、ある女性のことを取り上げており、天才ジャズピアニストと言われ、彼女は、留学してボストンの音楽大学に通いながら深夜バスでニューヨークに移動し、ライブハウスでの演奏でスキルを磨いていました。海の向こうでタフに自分の腕を磨いている彼女に驚き、とりあえず、「上原ひろみ」という名前だけを憶えておきました。その翌日、ちょうど中間テスト前で早く帰れたので、ツタブラをすると、このようなPOPがありました。「情熱大陸で取り上げられていたジャズピアニストの上原ひろみさん。エキセントリックなピアノは必聴！」そして、その隣には試聴機。試聴しながら、「このPOP作った店員さん、昨日の情熱大陸見てたんだなあ」と思ったたりしたものです。

多感な十代、無尽蔵のCDとビデオを誇ったTSUTAYAが近くにあって、私は私のカルチャーを形成する上で大きな影響を受けました。それは、そこにスタッフさんがいて私のような利用客との言葉なきコミュニケーションがあったことも大きいと思います。皆さんも今週末は久しぶりにツタブラいかがでしょうか？